

2025 年度海城アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学 拠点研究会・活動報告

講演会：人は食に何を求めているのか：台湾の漁港で食べるマグロとサーモンの刺身か
らの一試論

稲澤 努（尚絅学院大学）

日時：2025 年 11 月 7 日(金)17：00-19：00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 1 号館 206 教室

※対面開催のみ

講演要旨：

ヒトは栄養補給だけを目的に食事をするわけではない——これは文化人類学に親しんだ者であれば（そうでなくとも）、数多の事例から容易に説明できる自明のことである。

本講演で主に取り上げるのは、台湾のある漁港で提供される刺身である。この漁港を訪れる台湾人観光客は、そこで刺身を食している。「フードツーリズム」や、それを念頭においた「テロワール」概念など、観光の目的の一つとしての「食」をめぐる人々や社会の動向は、近年、一般社会でも学界でも注目されてきている。そのため、観光客が漁港で刺身を食するという行為は、少なくとも我々日本人にとっては、きわめて自然なことに思われる。

しかし、かつて台湾においては、魚を生で食べる習慣はほとんど存在せず、海水魚を食べる文化も限定的であった。台湾におけるマグロ漁・カジキ漁・カツオ漁の拡大は、日本による植民地統治と切り離しては語れない。また、寿司や刺身の流行にも日本の影響が大きい。新鮮な魚を求めて漁港を訪れ、そこで食事を楽しむという習慣は、日本の影響を受けて形成されたといってもよいだろう。

ところが、当該漁港で提供されているサーモンは、この漁港はおろか、台湾で水揚げされたものではない。もちろん日本産でもない。にもかかわらず、なぜ台湾の漁港でサーモンの刺身が観光客に積極的に提供されているのだろうか。

そもそも、台湾の漁港における生食の習慣は、いつ・どこから・どのように広まったの

か。また、この漁港に暮らす人々は、いつからそれらを食するようになったのか（あるいは食していないのか）。現段階では、それらを明らかにする資料はまだ十分に収集できていない。

本講演では、まず試論として、現在までに得られた資料をもとに、台湾においてマグロおよびサーモンの刺身が定着してきた経緯を概観する。そのうえで、なぜそれがこの漁港で提供され、食されるのかという問いを手がかりに、「人は食に何を求めているのか」について考察を試みたい。

海域アジア・オセアニア研究プロジェクト（MAPS）2025 年度若手研究者集会

日時：12月14日(日) 14時～

会場：東京都立大学南大沢キャンパス1号館102教室

※対面開催のみ

プログラム：各発表持ち時間の内訳（発表30分、質疑応答15分）

14:00- 14:05 開会のあいさつ

14:05- 14:50 発表① 大津留香織（人間文化研究機構／東洋大学）

「関係修復の「物語実践」の限界と可能性」

14:50- 15:35 発表② 大島崇彰（東京都立大学大学院）

「現代フィジーのカヴァ産業の動態——生産・流通における民族間分業に着目して」

15:35- 15:45 休憩

15:45- 16:30 発表③ 奥田真由（京都大学大学院）

「都市に生きる相互扶助——インドネシアジョグジャカルタ特別州におけるゴトン・ロヨンとアリサンの実践を通して」

16:30- 17:15 発表④ 今村宏之（国立民族学博物館）

「集団体操から「インドネシア武術」にいたる道——「大東亜共栄圏」におけるローカル武術の戦時利用について」

17:15- 17:20 閉会のあいさつ